
People Cosmos **非日常と抗う未来**

竹馬プシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

People Cosmos 非日常と抗う未来

【Nコード】

N2613T

【作者名】

竹馬プシー

【あらすじ】

非日常。それはその人間から見た視点で日常なのか非日常なのかはそれぞれ違う。一人は平和な日常を手に入れていたが、ある事がきっかけで殺人気になってしまう男。一人は英雄だったが、こちらもある事がきっかけで殺人衝動に芽生えてしまつて全てを失つた男。一人は、特殊な力をもっていたおかげで、高校生になるまで忌み嫌われ、虐めを受けていた男。日常から非日常に変わったものもいれば、非日常をずっと繰り返していたものもいる。そんな彼ら三人の非日常を描いた物語である。第一幕、*Got Force* 神と

少年の非日常』、第二幕『Operation Dark 堕ちた男の非日常』、第三幕『Skill Magical 能力魔法の非日常』それぞれの物語には全て繋がり、何百年と続く物語が始まる。

これ

は修正した『Got Force 神と少年の非日常』、その続編である『Operation Dark 堕ちた男の非日常』とさらに続編である『Skill Magical 能力魔法の非日常』の物語を纏めたものである。また修正した『Got Force 神と少年の非日常』の用語や内容は前と違って変えていたりしていますが、キャラの性格や物語の進行などは変わっておりませんので大丈夫だと思います。それと今まで別々にして書いていた『Operation Dark 堕ちた男の非日常』と『Skill Magical 能力魔法の非日常』はこちらでまとめる事にしましたので削除させて頂きました。修正する前の『Got Force 神と少年の非日常』は一応残しており、今でも連載しておりますが一応完結させるまで書き続けますので。

People Cosmos 非日常と抗う未来 プロローグ（前書き）

前回の『People Cosmos 非日常と抗う未来』のプロローグを書き直しました。ちょっとこちらの方が良いもので。

後、プロローグ修正に伴って小説のタイトルも修正版ではなくて『People Cosmos 非日常と抗う未来』という小説のタイトルに変更。全シリーズをここに書くことにしましたので。

People Cosmos 非日常と抗う未来 プロローグ

この物語はある三人が何百年という時を越え、それぞれがある目的を果たす為に戦っていた。

一人は平和な日常を手に入れていたが、ある事がきっかけで殺人鬼になってしまう男。

一人は英雄だったが、こちらもある事がきっかけで殺人衝動に芽生えてしまって全てを失った男。

一人は、特殊な力をもっていたおかげで、高校生になるまで忌み嫌われ、虐めを受けていた男。

彼らはそれぞれ、自分の問題がこれほど大きな問題になるとは思わなかっただろう。

また彼らはある事のきっかけが無ければこんな非日常的な事をしなくても良かった人達であるのだ。

けど彼らはある事をきっかけで非日常の中から生きる道を見つける。

そんな彼ら三人の物語が今始まる。

第一幕、『Got Force 神と少年の非日常』 主人公である竹宮隼人と兩宮優子を中心に起こり、全ての起点である物語。

第二幕、『Operation Dark 堕ちた男の非日常』

主人公である鈴之木康也すずのきこうやと雨宮優子の先祖となる雨宮香奈枝あまみやかなえを中心に起こり、真相ともいえる物語。

第三幕、『Skill Magical 不能力魔法の非日常』
主人公である竹馬奏麻たけまそうまと浅村奏あさむらひかなでを中心に起こり、最後の物語の前兆ともいえる物語。

そして最終幕、『Eternal Spec 非日常から日常へ』
三人の主人公と二人の断罪者による全ての物語の終着点である物語。

三つの物語が重なりしとき、全ての真相に辿りつく新たな物語が開かれる。

God Force 神と少年の非日常 プロローグ(前書き)

これがこの小説のプロローグです。さつきも言いましたが、もう一つの方は「People Cosmos 非日常と抗う未来」「非日常シリーズ(無限シリーズ)」の全体のプロローグです。そこを間違えないください。

また、あらすじに書いてあるとおり、『Got Force 神と少年の非日常』の修正版です。修正前と用語などが変わってまいります。気がつけてください。

また、最初のプロローグを読んだからは分かりますが、用語が変わっている部分がありますのでそこに注意してください。

例、能力都市 デイメンションスカルティア(デイメスティア)など。

God Force 神と少年の非日常 プロローグ

竹宮隼人はある一つを除いて、どこでも居るごく普通の高校生だった。

まあ、小学六年生から中学二年生までは普通ではするわけが無いような非日常をしていたが、それは物語の中で語ろう。

けど彼には普通の生徒とは違うものを持っている。

それは超能力者であることである。

自分が超能力者だと言うと、彼はディメンションスカルティア、通称ディメスティアに強制的に行かなくてはならないのだ。

ディメスティアは南鳥島の地下5000メートル下にある都市のことであり、本来の名前は南鳥地下街都市という名前なのだが、こちらの名前の方が知らされていない。

またディメンションスカルティアの由来は、地上には空港や港しかなくそれ以外は全て地下5,000メートルにあるかなり広い空間に店や住居などが存在し、しかも地下なのに中はまるで地上にあるかのようにされており、日差しを受けているように見えれば、雨や雪だつて降ることだつてあるようにされており、それが不可思議な現象である為に別次元という意味でディメンションが名づけられ、本部の名前であるスカルティアというのを誰かがその都市の名前だと間違えたのが理由で合わせてディメンションスカルティアと言う名前になり、さすがに名前が長いのでディメスティアという風には呼ばれるようになったのだ。

彼はそんなディメスティアが嫌いであり、理由は先ほどの小学六年生から中学二年生に起こった非日常が関連している。

だからそのために彼はディメスティアには行きたくなかったのだ。

しかし高校一年生の夏、彼は修道女の服装をしていた彼と同じくらいの年齢の少女に会ったとき、彼の人生は大きく変わろうとしていた。

竹宮隼人が修道女である少女に出会うとき、彼の非日常は始まる
うとしていた。

第一話

竹宮隼人はいつもどおり学校が終わると買い物をしてマンションに帰っている所だった。

特に大きな事件とかそういうことがあった訳ではなく、ごく平凡と存在する高校一年生である。

また彼は高校に通う事になってから親と離れて暮らし、東京で暮らしている。

そんな何も無い。彼にとってごく普通の日常だった。

「ふう、とりあえずこれくらいで当分は大丈夫だろ。さて、そろそろ家に着く頃……あれ？俺の家の前に居るのは誰だ？」

マンションのエレベーターに乗って、自分の家がある階に着くと、玄関の前に隼人と同年代くらいの少女が立っていた。

「あの、俺に何か用ですか？」

隼人は自分の家の玄関の前で待っている事は自分に用事があるのだろうと察して、すぐにその少女に近づいて話をかけた。

すると彼女は隼人の声を聞くと、すぐにこちらを向いてきた。そのとき、彼女の象徴でもある黒髪ロングの髪は彼女が顔を振り向いた事によって揺れた。また彼女が着ている服はシスターが着る修道服であった。

隼人はその姿に見惚れていた。とても綺麗で可愛らしかったのだ。隼人の方を向いた彼女は何かを確認するかのように、隼人に聞いてきた。

「あなたが竹宮隼人ですか？」

「そうですね、俺に何か用ですか？」
「私は名前は雨宮優子^{あまみや ゆうし}。あなたの言うとおり、用があつて来てみたわ」

隼人は自分の名前を言われて正直に答え、彼女、雨宮優子はそれを確認すると自分の名前を言い出した。

「それで用件は一体何なんだ？」

「あなたには来て欲しいところがあるの。それはあなたが一番分かっているはずよ」

隼人は自分にどこに来て欲しいのかと思つたが、その後になんか言われた言葉で隼人は嫌な予感が走つた。次に優子が何を言うのかがよく分からなくなってしまったのだ。それが今までの日常ががらりと変わるような事であることであり、しかもそれは今まで隼人が拒絶していた事だ。まあ、隼人には日常ではない事もやっていたりするのだが。

「あなたにはデイメンションスカルティア、通称デイメスティアに来て貰います」

「……どうしてですか？」

来て貰う理由を知っておりながらも、隼人は優子にそう聞く。そして優子は一度ため息を付きながら隼人が予想していた答えが返した。

「あなたも分かっているはずですよ。あなたは超能力者でありながらデイメスティアに来ていない。超能力者の全員は強制的にデイメスティアに連れて行かなければならない事を」

「……じゃあ行かないといったら」

「あなたを殺さない程度の大人数であなたに攻撃し、喻え何度足掻

こうと何が何でも連れてきます。無闇な攻撃は避けたいのであるべくやりたくは無いのですが、止むを得ないので無理やりでも連れて行きます。ちなみにこの辺は住宅が多いですけど、それについてはすでに対策済みですのであしからず」

その言葉を聞いて、隼人は少し驚いた。そこまでして連れて行くのかと思い、またさすがにやりすぎであるだろうとも思っていた。しかし隼人が驚いているにも気づいているのにも関わらず、優子はさらに話を続ける事にする。

「あなたに拒否権はありません。ついて来ますね？」

「チツ、分かったよ」

隼人もさすがにこんな些細な事で能力を使って戦闘を行なうのはどうかと思い、仕方無しに優子の言葉に従う事にした。

了承を得た優子はそれを聞いてエレベーターがある方に歩き出し、そして隼人の横を通った時にこう告げた。

「では明日の午後5時にまたここに来ますので、それまでに身支度などをしておいってください。それと、逃げ出しても監視をしている人がいるので余計なことを考えないでくださいね」

そう言っつて優子はそのまま歩いていき、エレベーターで降りていった。

その姿を見た後、隼人は玄関の鍵を開けて家の中に入っていった。

「さて、仕方ない。準備でもするか」

家の中に入ると、明日に急遽引越す事になったので即座に準備に取り掛かった。

翌日、隼人はいつも通りの時間に起きて、朝食を食べて学校に行く支度をした。

そして、今日で通うのが最後となる学校に向かうのであった。

「まったく本当にいきなりだよな。あいつがこの事を知ったらどう思うか……」

「な〜に一人で考えているの?」

隼人はそんな事を思いつつ学校に向かっていると、隼人の後ろから隼人にとってかなりお馴染みの声が聞こえてきた。

後ろを振り向くと、茶髪でごく普通にいるような女子高生の格好をしている、隼人と同じ学校の女子の制服を着ている彼女が居た。

彼女は清水瑞希^{しみずみずき}という名前であり、親のつながりで幼いときからの幼馴染である。

しかも隼人が東京の高校に行くと言ったとたん、何故か瑞希までが隼人が東京に一人暮らしをし、隼人について来たというのだ。その理由を聞いたことが何度かあるのだが、いつも言葉を濁されて結局聞き出せていないのだ。

ちなみに隼人が瑞希の事を考えていると、毎度のように何故か瑞希がいつの間にか近くに居たりして、隼人はその瑞希の行動にいつも驚かされてしまうのだ。まあ最近はそれも慣れてきているのだが。

「お前には関係ねーよ。」

「そうかな。さっきまで私のことで悩んでる感じだったような気がするよ?」
「つか毎回私の事を悩んでいるような気がするけど」

「俺は毎回お前の事を悩んでいるような人間じゃねえーから!!! そもそも何で俺がお前のことで悩んでいなければならぬんだよ! そんな事まで考えている奴は多分後に出来るだろうお前の彼氏か夫になるような奴くらいだよ!」

「まあ、そうだよ。……私の彼氏は隼人と決めているから、隼人に分かって欲しかったのに」

「ん? 何か言ったか?」

「な、何でもないから!」

瑞希が隼人によく自分の事を考えていると言う事に対して、隼人はすぐに突っ込みさらに続けて瑞希の事で悩んでいないのかといけないのかと言う。確かに普通の反応だろうし、瑞希もふざけて言っていたくらいである。まあ今回はどう見ても瑞希のことについて悩んでいたようだが。

また瑞希は最後にボソツと呟いていたのに、隼人が何を言ったのか分からなかったがそれに気づく。瑞希はそれに慌て、とりあえず何でもないと答える。隼人はその反応に違和感を感じたが、ふと何かを思いついたので話題を変える事にした。ちなみに話題を変えた理由がもう一つあり、それは瑞希の話のペースに合わせると、いろいろとめんどくさいと言う理由も含まれていたりするからでもある。

「あ、そうだ。この前のテストの結果は全体的にどうだった?」

話題を変えた内容は数日前にやった一学期の中間テストのことであり、そのために隼人と瑞希の二人でテスト勉強を毎日のようにしていた。そして二人は同じクラスなので、テストが全部返却されている事はお互いに知られているのだ。

また、このとき瑞希は話題を変えてくれたおかげで助かっていたりするというのは言うまでもないだろう。

「えっとかなり良かったわよ。隼人は？」

「俺も結構良かったぞ。あんだけお前と一緒に復習をしたんだからさ」

「そりゃ私が手伝ったんだから当然でしょ」

「それはこちらの台詞だ。俺がほとんどお前に教えていたり手伝っていたりした気がするのだが」

「あれ、そうだったっけ？」

「そうだよ！！」

隼人はそう言ったため息を吐きなくなっていた。話題を変えたとしても結局は瑞希のペースにされてしまい、それにまた隼人が合わせられてしまうのだ。ある意味ストレスの原因でもあるような気がする。すると隼人は最近思っていたりもするのだ。

余談だが、瑞希は隼人と一緒に通っている高校の受験をする時に試験二日前に隼人の実家に来て「勉強教えて〜」と言ってきたのだ。その瑞希の行動に隼人は驚いて呆れていたくらいだった。さらに言うと、瑞希はこの高校に受かったのだからまぐれに近いため、隼人も受かった事に驚いたくらいだった。

そして瑞希は未だに隼人と一緒にいれると思っているのだろう。そんな事は絶対に有り得ない事であるのは分かっていると思うが、それが今日だとは思っていないのだろうと隼人は思っていた。

「また、何か考えて事している〜。また私の事で悩んでいたの？」
「さっきから言っているけど、お前の事で考えていたり悩んでいたりしていないからな！！」

瑞希はまたしても隼人に対してそう言い、隼人もそれに突っ込みそしてまたため息を吐いた。

そんな他愛無い会話がこの後も続き、そして二人が通う高校に着

くのだった。

「じゃあ俺は職員室に用があるから先に教室に行つていってくれ。」

下駄箱で靴から上履きに履き替えると、隼人は教室に行く前に昨日の件の事で職員室に行く用があった為、瑞希に先に教室に行くようにと行っておくことにする。瑞希なら一緒にいて来きそうな感じだと隼人は思っていたが、その心配は必要なかったとすぐに分かる。

「また問題でも起こしたの？」

「またって何だまたって！！俺がいつ問題を起こしたんだと言うんだ！！！」

「え、いつも起こしているじゃなかったっけ？」

「いつも起こしてねーよ！！ってか問題すら起こしてないからな！！！」

まあ、このように隼人をからかって話しを返してきたからである為であり、瑞希がからかって隼人に話しを返した場合は、大抵は余り気にしていないという事である。そういう事である為、それほどその事で考えるする必要は無いと、隼人は幼い時から瑞希と知り合いなので分かっているのだ。

隼人はこの反応を見て「ふう」と安堵し、とりあえず急いでいるのでこれ以上は瑞希のペースに合わせるわけにも行かない為にそろそろ切り上げる事にしようとする。

「とりあえず先に教室に行つていってくれるか？」

「分かったわよ」

瑞希は隼人が急いでいると言う事は分かっていたので、これ以上

は隼人とからかうのは隼人を困らせると分かっていたので、自重してこれ以上はからかうのを止める。

そして二人は一度分かれ、瑞希は自分の教室に、隼人は用がある職員室にそれぞれ向かうのだった。

第二話（前書き）

気づいたと思うけど、前回と違ってかなり纏めて投下しております。

第二話

「それじゃあ、俺は先に教室に戻っていますので」

隼人は職員室の出入り口で一度礼をして職員室を後にする。

職員室で担任の先生に話した内容は自分が超能力者である事を言い、そのためにデイメステアに行かなくてはならない為に転校すると言う事を話したのだ。

本来なら先生方も超能力者を見つけたらデイメステアに知らせることは言われているので、今まで隼人がどうしてデイメステアに自分から行かなかった等と言ってきたもおかしく無いと隼人は思っていたのだが、担任の先生は予想外に何も言わなかった。担任の先生が何も言わなかった理由は隼人の表情を見てすぐに分かり、本当は隼人がデイメステアに行きたくないと何となく察していたのだ。だから理由を聞いて決めるような事をするのはどうかと思って何も言わなかったのだ。

隼人には担任の先生がどうして何も言わなかったのか未だに分からないでいたが、何も理由を聞かれなかったのでかなり安堵していたのだ。

余談だが、幼馴染である瑞希も超能力者であり、隼人が超能力者だというのはもちろん知っていたりする。

隼人が教室戻り自分の席に座って数分すると、チャイムが鳴ってそれからすぐに担任の先生が入ってきてホームルームが始る。

ホームルームが始まると、いつも通りに担任の先生が出席を取り、今日の予定やお知らせなどを言い、それから隼人に教卓の前まで来るようにと言ってきた。

クラスの生徒達は何故隼人が先生に呼び出されたのかと思っていると、担任の先生の口が開いて隼人の転校の件について話し始めた。

「今日で竹宮くんはある事情によって転校することになりました」

その言葉を聞いたクラスの生徒達はざわめき始め、昨日までそんな話は無かったのに何故突然なのかと思い始めていた。

「まだ知り合ってたった数ヶ月でしたが、今までありがとうございました」

隼人がそう言うと、クラスの生徒達はざわめきを静め、全員が隼人へと視線を向けていた。

「そういうことなので今日一日、竹宮くんとの最後のクラス生活を楽しみましょう。それじゃあこれでホームルームは終了」

ホームルームが終了すると担任の先生は教室から出て行く。担任の先生が出て行くと、すぐに瑞希が隼人の腕を引っ張って、生徒達があんまり来ない所まで連れて行かれる事になった。

「朝そんな事言ってなかったじゃない！どうしていきなり転校なのよ！？」

瑞希がこんな生徒達が来ない所まで隼人を連れて来て何かと隼人は思ったが、瑞希が真面目な話をするくらいなのでやっぱりそのことだよなと思っていた。

そう、このとき隼人は瑞希が何の話なのか大体分かっていた。今までずっと一緒に居たように等しいくらいなので、お互いに何かあ

るときは絶対と言って良いほどに情報がお互いに入ってくるのだ。
しかし今回は昨日の今日のものなので、瑞希にそのことが自分に入ってくることは無く、先ほどの転校という言葉は突然何か衝撃な事実を聞かされたと言っても良いようなものだったのだ。

「ごめん。急に転校する事になったからな」

「どうして急に転校の話になったの！」

「それは言えないんだ」

「どうして！どうして何も言えないのよ！！」

「お前なら大体転校する理由が分かるはずさ。本来、俺達はこのに居てはいけないのだからさ」

「そのことと一体何の関係……まさか、そのまさかなの？」

瑞希は隼人に問い詰めていたが、やがて隼人がどこに転校するのが理解する。どうやら瑞希がどこに転校するか分かったようなので、自分の口から事実を言う事にした。

「そのまさかだ。俺はディメスティアに超能力者だということがばれている」

「でも、隼人は私と同じでディメスティアが嫌い何でしょ！！どうしてそんな所に行くの！？」

瑞希の言うとおりである。隼人がこれから引越す場所であるディメスティアは二人にとってかなり嫌っている場所であり、向こうが自分達が超能力者だという事を知られるまでは絶対に行かない事にし、気づかれた場合では逃げ切って見せるとお互いに決意していたくらいなのだ。しかし、

「本当なら逃げたいのだが、それは出来ないんだ。今この時点でも俺はどこからか監視を付けられているさ。俺が逃げない為にな」

そう、その考えは昨日打ち砕かされたのだ。隼人の家は完全に監視されているし、今この時点で隼人自身にも誰かに監視されているのだと隼人は分かっていたのだ。

けど隼人と瑞希はある事を忘れていた。今までずっと盗聴されているという可能性があるという事だ。けどまあ結論を言っと、さすがに盗聴器みたいな物は一応ディメスティアも日本の国土内である為に、法律でプライバシー権限があるので制服とかに付けられていない。

なので今の二人の会話の内容は聞かれてはいないのだが、盗聴されていると言う可能性を忘れている二人には危なかったのかも知れなかった。まあさつきも言ったが盗聴器は仕掛けられてはいないので結果的に大丈夫なのだが。

「　　いいわ。じゃあ私も行くから。隼人だけにあんなところに行かせない。私も隼人と同じ超能力者なんだから」

「お前は来るな。あんなところ、俺だけで十分だ。お前だけにはあんなところには来て欲しくない」

「でも！」

「それに俺は、瑞希に平和な日常をして欲しいんだ。あんな非日常なところに居てほしくねーんだよ。だから、俺の願いを聞いてくれないか。瑞希まで巻き込みたくないんだよ……」

瑞希は今までの隼人の話を聞き、自分も隼人と一緒に行くと言うが隼人に止められる。隼人は自分の幼馴染まで巻き込みたくはなかったのだ。瑞希を巻き込まない為なら、たとえディメスティアという場所が嫌いだとしても行く決めていたのだ。

瑞希は隼人がそこまでして自分を行かせたくないと分かったので、自分の方が折れる事にした。

「分かった。でもこれだけは約束して。向こう行っても絶対に死なないでね」

「ああ、約束する。あんな非日常な所だとしても、死ぬつもりは無いからさ」

隼人はそう言って瑞希の肩を軽く叩き、先に教室に戻る事にした。

「本当に、自分の事しか考えてなんだから。私の身にもなってよ」

瑞希は悲しそうな顔をしながらそう言っていた。

「隼人、この後クラスの人々とお前の友達と一緒に前のお別れパーティーをしようというのがでているのだけどこの後大丈夫か？」

今日の授業が全て終り、帰りのホームルームが終わると隼人が去年から友達である杉山双太すきやまそうたに話しかけられ、自分のお別れパーティーをしないかと誘われてきた。

隼人にとってそれはとても嬉しかった事だったが、この後帰った後も忙しいし、一応監視されている為にその誘いに断るしかなかった。

「ごめん、これからすぐに家に帰って引越しの準備をしないといけないんだ。多分今日の夜には家を出ると思うから、急がないといけないんだ」

「そっか。最後にお別れパーティーをしたいとは思っていたのだけだな。じゃあみんなには俺が伝えておくよ」

「ああ、悪いな」

隼人は杉山に謝り、杉山もそれは仕方ないと分かっていたのでお別れパーティーは諦め、その事を誘っていたみんなに伝える為に隼人から離れていった。

そのあと友達とか同じクラスの人たちから俺に話しかけてきて、隼人に対してお別れの挨拶を一人一人してきて二十分くらい時間が掛かってしまった。

それから隼人はすぐに帰る準備をし、いつも通り瑞希と一緒に帰ろうとしたが、いつの間にか瑞希は教室におらず、先に帰ったようなので仕方なく一人で帰る事にする。

そして学校を出て家に向かって帰っていると、いつも帰るときに瑞希と分かれる十字路の端っここで瑞希が立っているのを見つけた。

隼人は瑞希を呼び瑞希のほうに駆け寄っていく。瑞希は隼人の声を聞くとこちらを向き、やっときた見たいな顔をしているので、隼人が来るのを待っていたような感じだった。

瑞希の近くまで駆け寄ると、隼人は何故こんな所に居るのかと聞き出した。

「どうしてこんな所で立っているんだ？」

「本当は隼人と一緒に帰ろうと思ったのだけど、なんか話しかけにくかったからね」

「そっか。それは悪かったな」

「別に良いよ。隼人は今日で転校なんだからみんながそうなるのも分かってたし」

だからここで待っていたのよ。瑞希は続けてそう言い、いつもと変わらない表情で言うのだった。

しかし今の瑞希は自分の思いを押し殺しているのだ。これを今言ってしまうと自分の中の気持ちが一気に崩壊しかねないからだ。

「ん、どうした？なんかいつもの表情に見えるけど無理してないか？」

「そ、そんな事ないわよ。何も隠してないから」

「嘘だな。俺達は何年の付き合いなんだと思っっているんだよ。お前が何か隠しているという事はすぐに分かるんだよ。それで何を隠しているんだ？」

十年以上の付き合いなもので、どうしても瑞希が何か隠しているのが分かってしまう隼人は瑞希に対してそう言った。

そして瑞希は自分の感情が一気に爆発したかのように、隼人に抱きついてきた。突然瑞希が抱きついてきたものだから隼人はさすがに驚いていた。

「お、おいどうし……」

瑞希が突然抱きついてきた理由を隼人は聞こうとしたが、瑞希を見て言葉が詰まってしまふ。

泣いていたのだ。隼人の胸に顔をつけて泣いていたのだ。どうして泣いているのか隼人には大体分かっていたので、瑞希の言葉を待っていた。

「行かないでよ……。あんなところに行かないでよ。隼人が心配で心配でいられないのよ！このままだと私のほうがおかしくなりそうなの。だから私はずっとこのままが良いのよ！もう何も事件が起らないようなこんな日常が！！中学の時みたいなあんな非日常はこりこりなのよ！！だからお願いよ。あんなところに行かないでよお……」

隼人はその言葉を聞きながらずっと聞いていた。今言った事は全

部瑞希の本心なんだろう。先ほど二人で話したときはそんな事を言っていないかったが、隼人の事を相当心配していたのだろう。また、何も事件がない日常が隼人と一緒に欲しかった事も望んでいたのだろう。中学の時、隼人と瑞希はあんな残虐な事を繰り返していた事がある為、もうあんな非日常みたいな事を瑞希はしたくなかったのだ。

瑞希の話已全部聞いた隼人は、右手で瑞希の頭を撫で始めた。突然隼人が撫で始めてきたのに瑞希は少し驚きしていた。

「大丈夫だよ。もうあんな事はしたくない。あんな殺人鬼みたいな事なんて絶対にしたくない。人は殺すかもしれないけど、あんなに無差別には殺しはしないさ。それにデイクステイアに行ったらあの実験の首謀者が分かるかも知れないんだ。俺はその人物を突き止めたいという気持ちもあるんだ。だから俺は行くよ。これ以上あの事で先延ばししたくないんだ」

隼人は瑞希の頭を撫でながらそう言っていて、瑞希はそれを聞いて泣き止んでいた。そういえば隼人ってそういう人物だったよね。と思っていたのだ。自分が関わっている事件は何が何でも解決させる。特に先ほど行ったあの実験というのは隼人と瑞希の人生を大きく変えたものであるのだ。だからその実験の件を解決出来るのなら隼人は絶対に行きたいのだろうと思っただのだ。まあ最初はデイクステイアなんて行きたくないとは言っていたが、昨日の夜の間に隼人はそうとも思っていたから、決意が出来たのだと思うのだが。

ちなみに、普通は事件に関わる事なんてかなり少ないだろうと思うが、元々二人の家柄は竹宮家と清水家という名の知れている家柄で、隼人と瑞希が超能力を持っているという事はその親や兄弟、親戚だつて超能力を持っているので、それ以外にも理由はあるが非日常なんてよくある日常茶飯事みたいにつき物に近かった。

しかし本家から一人暮らしを始めた二人にとっては日常に戻った

に近かいのだ。

「分かったよ。じゃあ学校でも言ったけど死なないでよ！」

「分かってるさ。それじゃあ俺は行くな」

隼人はそう言って瑞希と別れる事にした。

瑞希は隼人の背中を見ながらこう呟いていた。

「はあ、結局、好きだって告白できなかったな。そのためにここで待っていたと言うのにな。でもまあ、少し気分が良いから今度あったときに頑張るか」

瑞希が一番言いたかった事を言えなかったが、前向きに考える事にして自分も家のある方向へ帰る事にしたのだった。

第三話（前書き）

修正前の「Got Force 神と少年の非日常」の第一部である第四話〜第六話まで纏めました。

第三話

瑞希と別れ、それから数分歩くと自分の家があるマンションの前に着き、エレベーターで家がある階まで上がり、エレベーターの扉が開いた後、隼人は自分の家の前で優子が待っているのを見つける。多分自分が帰ってくるのを待っていたのだろうと分かったのだが、まだ4時10分くらいなのに何故か隼人の家の玄関の前で待っているのだろうと思った。

「あれ、何でもう家の前で待っていたのですか？まだ五十分もありますよ」

「あら、居たらなにか悪かったかしら？」

「そういう訳ではないですけど、少し気になったもので」

「それはそうかもしれないわね。まあ、少し早く来た理由には訳があったから少し早く来たただけなんだけどね。少し、予想より遙かに向こうの動きが早かったものだから急がないといけなくなったのよ」

「はあそうですか。とりあえず中に入ってください。飲み物とかは用意できませんけど」

「別に良いわよ。こちらが突如あなたの前に現れて突如引越すようにしたのだから。まあ、あなたがとつくに前からデイクステイアに来ていればそんな事にはならなかったのですが」

隼人は優子を家の中に居れ、床に座らせるのはどうかと思っただが、引越す為に荷物を纏めてしまったので仕方なく優子を床に座らせた。

なぜなら、今の隼人の家の中がどんな状況なのかと言うと、ダンボールが所々に置かれており、いつでも引越せるような状態に昨日からしてあった。なので優子には申し訳なかったのだが、全部仕

舞ってしまった為に仕方なく床に座らせたのだ。

また、さにげなくデイメスティアに居ればこんな事にならなかったと言う優子に対して、隼人は少し不機嫌になり、床でよかったのではないかと思っていた。

「それで、その急がなければならなかった理由って何なんですか？」

隼人は不機嫌のまま、そのことについて聞こうとする。多分それには何か重大な事でもあるのだろうと思っただのだ。それは誰もがそんな事を言われたら思うことだろうが、隼人にとってそれはデイメスティアで何が起こっているのかという情報を手に入れられるかもしれないのだ。だからこそ隼人はこういう事になるとどうにかしても聞こうとするのだ。

「まずこれはデイメスティアに行く前に話そうと思っただけけど、今デイメスティアでは二つの派閥が争いを起こしているの」

「今、デイメスティアではそんな事が起こっているのですか？」

「ええそうよ。今、デイメスティア内で二つの派閥に分かれていて、それぞれがデイメスティアを統括するか争っているのよ」

隼人はそれを聞き、デイメスティアで起きている状況を理解していた。デイメスティアのニュースはこちらとかでは報道されている事は少ないので、だからこそこういう情報は隼人にとって重要な情報でもあるのだ。

そして隼人は優子からそれを聞くと、確認の為に一つ質問をする事にした。

「雨宮さんはその中の派閥に所属しているのですか？」

「ええそうよ。私もその派閥の内の片方に所属しているわ」

「なら、俺を雨宮さんの組織に勧誘しに来たということでもあるん

ですね」

「あなた鋭いわね。でもそれは半分正解、半分不正解よ。確かに一部はあなたを勧誘しに来た理由も一部は含まれるけど、本来の目的である超能力者を集めるとというのが今回の私の役目であるからね。別に派閥に所属しないで普通に生活している超能力者だって居るから勧誘には強制しないのだけど。まあどちらにしるあなたをディメスティアに連れて行かなければならないから」

隼人の言葉に優子は少し驚いていた。普通、こういう事はお互いに有利にならないようにする為にどちらの所属ではない人間を連れてくるのが普通だろう。しかし隼人は現時点で派閥争いが起こっているのなら、こういう人間は絶対にどちらかに所属しているのだろうと推測し、どちらにも所属していない人間が居るのなら絶対に生き残れないだろうと思ったので、優子もどちらかには所属しているのだろうと思ったのだ。

「そうですか。それじゃあもう一つ、あなたが所属している組織ともう一つの組織はどう違うのですか？」

「私たちの組織『ユニオンアイティス』は元々ディメスティアを統括していた組織で、六年前まで超能力者を普通に育成してきたわ」

そして隼人はもう一つ聞きたい事を聞くと、優子はすぐに答えて『ユニオンアイティス』は昔からディメスティアを支えていた派閥だと答えた。隼人は四年前まではディメスティアに行きたいと思っており、それが優子が所属している派閥が統括していたと今の言葉で分かった。そして優子は話を続けてきた。

「けど、もう一つの組織『スキルレジエンディア』を統括している天壤てんじょうという人物が不満をに思ってたらしく、それから二つの派閥に分かれてしまったの」

「その天壤という人物は何で不満を持っていたのですか？」

「確か、どうしてもつとデイメスティアを進化させないのかとそんな事を言っていた気がするわ。けど、天壤という人物は今ではかなり酷いことをしていて、人体実験なんか躊躇無くやっているのよ。許せないっいたらありやしないわ」

「じ、人体実験ですって!？」

「そうよ。あの人は本当に酷い人だわ。とくに一番酷いと思った人体実験は岐阜の白川村という所で行なわれた実験だわ。全員が超能力を使えるようにする実験が行なわれたのよ」

隼人は優子から天壤が人体実験を普通にやっていると聞くと、天壤に対して怒りが現れていた。人体実験という言葉は隼人にとって一番大嫌いな言葉であり、デイメスティアに行きたくなくなった一番の理由なのだ。人体実験は隼人にとって悲しい出来事ではなくなかなかかなりお世話になっていた隼人の祖母を人体実験によって死ぬ事になってしまったのだ。

しかも優子は岐阜の白川村と言った事に驚き、隼人の祖母も白川村に暮らしていたのだ。

だからこそ隼人は隼人の祖母を死ぬ事になった原因が天壤だと知り、天壤の事がかなり許せないで怒りが湧いてきていたのだった。

「そしてその人体実験が失敗に終わったあと、その人体実験を受けられた人間達は何者かによって一人残らず殺された事件でしょう？」

そして隼人は怒りが抑えられないままこう言った。

「どうして、あなたがそのことを知っていますのですか!？その事件は人体実験が行なわれたという事は公表されていないのに」

優子は隼人がその事件の事を詳しく知っているのに驚いていた。

そう、その事件は表面上では白川村で人体実験という言葉は一つも無く、突然殺人鬼が現れてその殺人鬼が一人残らず全員殺した事になっているのだ。だからそこで人体実験を知っていた隼人に優子は驚いていたのだ。

何故隼人がその事件の事を詳しいのかと言うと、隼人もこの事件に関わっているからだ。けど隼人はその事を言わず、優子にはその人体実験には祖母も居たという事だけを話す事にした。

「あの事件の被害者の中に俺の祖母がいたんです。どうして祖母が死んだのかというのを」

「でも被害者の親戚にもそんなことは何も言っていないはずですよ」「確かにそうでしょうね。そんな事を言ったら人体実験の事は公にされてデイメスティアには大変な事になりますからね。けど俺はその事件をあらゆる方法を使って調べまくった。そしてデイメスティアが関わっていることを知ったんだ」

隼人は一部本当のことを言わないでまるで事実のように優子に言った。大半の事は事実なのだが、一部嘘の言葉が混じっていた。

けど隼人の言葉には一つも違和感がある言葉が無かった。

優子はまんまと隼人の言葉を信じてしまったが、

「それでも、そんなことまで調べてそんなに情報を知れるはずが」

優子はどうやってたらそこまですてその情報を知れるのかと疑問に思ったのだ。そんな疑問に思っている優子に隼人は、近くにあったダンボールを開け、その中に入っていた冊子の一つ取り出して優子にそれを見せることにする。

「じゃあそこにある資料を見てください。今まで行われた人体実験が事細かく書かれていますから。それで俺が調べた事は本当だと分かるから」

隼人は天壤が率いる『スキルレジエンディア』という派閥が人体実験にかなり関わり、『ユニオンアイティス』は人体実験に関わっていないと優子の言葉で分かった為、その資料を見せる事にしたのだ。

まあ、優子が嘘を付いて本当は『ユニオンアイティス』も人体実験をしているという事も考えられたが、優子が話している言葉にはどう見ても嘘は付いているようには見えなかった。未だに少し警戒はしているが見せるだけなら良いだろうと思ったのだ。

また、隼人は優子の言葉が本当ならデイメスティア全体が悪い訳ではなくて、ごく一部が悪かっただけだったのかと少しデイメスティアに対する感情が少し変わっていた。

優子に隼人が調べた資料を見せてから数分後、優子は隼人が調べた資料をすべて読み終わると驚いた顔をしていた。

「どうやったたらこんなに資料を調べられるの？私たちが持っている資料よりかなり詳しいわよ」

「そこまで驚く事なんですか？」

「そりゃあ驚くわよ。ここまで『スキルレジエンディア』が行なった人体実験の情報を知っているなんて、私たちでもここまで知らないのよ」

隼人はそれを聞いて少し驚いていた。まさか自分が調べた『スキルレジエンディア』が行なった人体実験の資料が、もう一つの派閥である『ユニオンアイティス』より調べていたなんて思ってもいなかったのだ。

元々、隼人はこれを世間に公表しようと仕返す為に、白川村の人体実験が起こった後からデイメスティアが今まで行なわれた人体実験をすべて調べていただけだったのだ。だから自分がそこまで調べているとは思っていなかったのだった。

「とりあえずこの話は後ほど詳しく聞かせてもらおう。そろそろ出発しないといけない時間だから」

「分かりました。」

そう言っただち上がった隼人と優子の二人は玄関を出る事にする。玄関を出ようとした時、隼人は一度家の方を向いてもうここには帰ってこないのだと思っていた。

「何してるの？さっさと行くわよ」

「あ、すみませんでした」

そして隼人は優子にそう言われて、今まで住んでいた家を後にするのだった。

二人が家を出てから数十分後、二人は下に止めていた車で移動して港に着いた。港にはとても大きい巨大戦艦が一隻止まっており、隼人はその巨大戦艦に乗るのだろうと思った。けど隼人はある事を疑問に思っていたので優子に尋ねるのだった。

「どうして飛行機ではなく巨大戦艦で向かうのですか？」

そう、どうして時間が掛からない飛行機ではなくて、逆に時間が掛かる船で行くのだろうかと隼人思ったのだ。

「飛行機だと乗っている間に敵に狙われたら、超能力で対抗できな

いでしよう。だったら敵が襲撃してきても良い様に巨大戦艦に乗ったほうが、こつちも対抗できるでしょ」

「なるほど。確かにそうならば巨大戦艦に乗った方が良いな。」

優子は隼人の疑問にすぐに答え、隼人もそれを聞いて納得する。

確かに飛行機だと外からの攻撃をされた場合は格好の的であるし、飛行機内からだところからは絶対に戦えない。だから巨大戦艦で南鳥島を目指した方が一番良かったのだ。

隼人が納得していると、ふとある事に気づいた。

「そういえば俺の荷物はどこにあるのですか？さっきまで家にあっただので、いつ運ぶのかと思いましたので」

「それなら私の仲間に頼んで運んでもらって、今は巨大戦艦の中に運んだとさっき聞いたわ。それにしても、私がかが家に着いた時は鍵が掛かっていなかったから一応鍵を閉めたけど、鍵をかけないで家を出るなんて泥棒にも入られたらどうするつもりだったの？」

「あ、そういえばそうだった。ってか、どうやって鍵を閉めたんだ？」

隼人は朝急いでいたから鍵を掛けるのを忘れていた事に今更ながら気づいた。そして優子がどうやって隼人の家の鍵を閉めたのかと疑問に思い、隼人は優子に聞くことにする。

「まあ、ここに来る前にある人から鍵を借りてきたんだけどね。」

「なるほどな。でもこの家の鍵を持っている人は俺を含めて四人しかいないのだからな」

「多分そのうちの一人よ。あなたも知っている人だからね。後ちなみに、鍵が開いていたから勝手に家に入ったわよ」

「っておい、ドアが開いているからって勝手に人の家に入るな！」

「さらに言うと、例えば鍵が閉まっていようと鍵を開けるつもりだっ

たからね」

「……もう突っ込む気もなくなったよ」

一体誰だろうと考えようとしていたら、優子がとんでもない発言をしてきて突っ込んだ。しかし二度目の発言を聞いて隼人は突っ込む気もなくなっていた。そして優子はそんな隼人に更なる追撃をするのだった。

「あらもしかして、何かいやらしいものでも入ってたのかしら？」

「そういうわけじゃねえよ！いやらしい物とか関係なく勝手に入るなって言ってるんだよ！」

「あら、いやらしい物が入ってないって否定しないんだ」

「うぐつ。それは俺だって思春期だからな」

「なにそこで正論化しようとしているのか分からないのだけど」

最後に優子がそう言われて、隼人は何かに負けた気分になっていた。

「まあ、今はそんなどうでもいい話はほつといてそろそろ船が出発するからさっさと歩く」

「どこがどうでもいい話なんだ！！」

「本当にどうでもいい話だと思うのだけど。とりあえず船に乗るわよ」

「わ、分かったよ」

隼人は優子をみて幼馴染の瑞希を思い出したが、優子の場合は瑞希並に、いや瑞希以上に疲れれると思っていた。また、瑞希から分かれても自分はこういう立場のかとも思っていた。

そう思いながらも隼人と優子は大型戦艦に乗るのだった。

隼人達が巨大戦艦に乗ってからさらに数分後、巨大戦艦出発した。

「はあ、もうあそこには帰らないんだろうな。結構いい町だったのにな」

隼人は巨大戦艦が出発すると外に出て港がある方を見ていた。昨日まで隼人が暮らしていた町は隼人にとってたった数ヶ月しか暮らしていなかったが、それでもその間に出来た友達や置いてきた幼馴染を考えると恋しく感じてしまうのだ。

「なんか退屈そうね。もしかして、幼馴染とかが恋しかったりして。」

「……まあ、そうなんだけどな」

「あら、ボケたつもりだったんだけど？」

「突っ込んで欲しかったのかよ。まあ、幼馴染が恋しいだけでなく友達とかもさ」

なるほどね。つと優子は言っただけで隼人の言葉に同感していた。隼人はふと優子の方を見て、始めてあった時から今までずっと気になっていた事を聞くことにした。

「そういえばさ、雨宮さんは何でいつも修道服なんですか？」

「ああこれね。それは秘密の方が何か秘めていて面白いから言わないわ」

「いや、それを聞かれると何も秘められていないとわかるのですが……」

「それで何の話だったけ？」
「もう良いです」

隼人はさっきまで自分が暮らしていた町を見て恋しく感じていたのに、優子によってぶち壊されたので、軽く気分を悪くしながらも突っ込んでいった。

「嘘よ。すっかり覚えてるわ。何故さっきからずっと修道服を着ているかでしょう。ちなみに理由なんか無いわよ。別にシスターを目指していたわけでもなく、ただ単に着慣れているからよ」

「修道服が着慣れているってなんか可笑しいですね」

「まあ確かにそれは私も思うわ。何で修道服をずっと着るようになったのかなんて、自分でも分からなくらいだし」

優子が修道服を着慣れているという言葉に隼人は笑い、優子自身も可笑的いと思って笑っていた。

確かに普通はシスターの役職をしていないのに修道服を着慣れているというのは可笑しいと思ってしまったのだ。

そんな二人が笑っていると、優子が突然隼人に話しかけてきた。

「後、私を呼ぶときは雨宮さんじゃなくて雨宮か優子で良いから。なんか堅苦しいく感じるのよね。ちなみに優子の方がみんなに言われているから優子って呼んでくれたほうが嬉しいけどね」

「でも良いんですか？」

「別に良いわよ。身分とか地位とかそういうのはディメスティアには無いのだから。ごく一部はあるけどね。統括理事局の人間とかはさすがにね。だから……」

優子はその先を言おうとした時に突如戦艦内で警報がなり始めた。隼人は何事かと思っていると、アナウンスが流れる。

「敵襲だ！総員、敵である『スキルレジエンディア』と戦つたために
備えるんだ！！」

そう、先ほどの警報は『スキルレジエンディア』が攻めて来たもの
のだったのだ。

第四話（前書き）

超お久しぶりです。

一応修正前の方は進めてはいるのですが、こっちは少し放置的な感じでしたねww

本当にすみませんでした！！

ついでに、読みやすいように今まで書いてあったものも修正しました。

それではどうぞー！！

……なんか、前話に比較してかなり良くなっているような^^；

第四話

「やっぱり来たわね」

優子はまるで敵が襲撃してくるかのようにつた。そして表情は先ほどと変わって真面目な顔になっており、修道服にあったポケットの中から耳掛け式のトランシーバーを取り出して誰かに連絡を始めてた。

「ええ、相手は三機ね。分かったわ。私も今すぐそっちに行くから」

優子は連絡が終わると隼人の方を向く。

「あなたは船の中に入っていなさい」

「俺も戦います」

雨宮は船の中に居ると隼人に言ったが、隼人は即自分も戦うと言った。

「駄目よ。私たちはあなたをデイクスティアに送る命令で動いているの。もしあなたが死んだら意味が無いでしょ。だから船の中に居て」

しかし、優子は上からの命令で連れてくるように言われていると言い、断る。

「そうかもしれないが……」

「それに、あなたの能力は私も知らないし、そのことでああなたが足手まといになったら困るだけだから」

「……分かった」

正論を言われ、隼人は渋々にもその事に従う事にして、自分の部屋に戻るのだった。

けど、そんな事で隼人が諦めるわけが無かった。

隼人が部屋に戻って数分もせずに、外では銃撃の音が鳴り戦闘が始まっていた。

「俺は、何もできずこのまま戦闘が終わるまでここに居ないといけないのか？」

隼人はその銃撃の音を聞いて少しイライラしていた。自分には超能力という力があるというのに、何もできないイライラさが。

もちろん、優子の言っている事は隼人も分かってる。組織や集団的な行動する時に命令が絶対であり、それに従うという事ぐらいは隼人でも分かる。そうでなければ纏める事なんて無理なのだから。

「でも、こんな俺に親切にしてくれた彼らを助けたい」

けど、隼人がこの船に乗った後、実は船に乗っている船員にかなり親切にしてくれたのだ。

たった一人の為にこんな戦艦と船員を出したらしい事を優子から聞き、普通なら睨まれたりしてもおかしくないのに、親切にしてくれたのだ。

また、優子と他愛無い話をしていたのに隼人はその事がとても楽

しいと思った。

それに隼人は人を何人も殺めた事がある。そんな事は隼人以外分らないと思うが、そんな自分に対してこんなにも親切にしてくれることに嬉しかったのだ。

だからこそ、その恩返しのためにも隼人は戦いたかったのだ。

「命令違反だが、それでも俺は彼らを助けたいんだ!!」

そして、隼人は優子に部屋に居るように言われたが、命令を無視して部屋を出て外に飛び出すのだった。

部屋を出て船の外に出てみると、そこには死体が所々にあった。死体には銃弾が撃たれた跡があり、ある所では血の池が出来ていた。

「これは酷いな……」

目の前の惨状を見て、率直にそう思う。

それから空を見ると、戦闘機が二機いる事が分かった。

優子の会話から察すれば、一機は破壊したという事が分かる。

戦闘機から銃弾を避けながら、隼人は先に進む。

少し歩くと優子が遠くに見つけ、一つの戦闘機に向かって冷凍能力を使っているのを見るのだった。

察するに、優子は冷凍系能力者だという事を隼人は分かる。

そして、兩宮は戦闘機を凍らせた。そこまでは良かった。

しかし、

「っ!?! し、しまったっ!! 凍らす方向を間違えた!!」

優子は戦艦の方に落ちてこないように凍らせたのだが、戦闘機が回避しようとして優子が想定していた所とまったく別の後方の部分を凍らせてしまい、このままでは戦艦に落下する方向だった。

しかも、その戦闘機はよりもよって優子の方に向かっており、戦闘機の大きさからして優子が今から逃げるのには遅すぎっており、一応戦闘機が沈没しないように戦艦を作られているのだが、このまま進むと優子に直撃するのであった。

隼人は何も考えず、優子の方に走り出す。

「優子っ!!そこにしゃがめ!!」

隼人は怒鳴りながらも優子に言う。

隼人が突然現れたのに優子は驚いたが、すぐに表情を戻す。

「あなた、船の中にいなさいって言ったのにどうして来たの!?!このままだとあなたも死ぬ」
「いいから、言われた通りしゃがめ!!」

二度目の怒鳴りを聞いて、優子は言われた通りしゃがむ。

「でも、一体あなたは何をするつもりなの!! まさか、何も対策を持たないで来たわけではないでしょうね!?!」

「大丈夫だ。俺にはこれがある」

そう言って隼人は来ていたジープンに入っていたナイフを取り出す。

どこにもありそうなナイフ。しかしその取っ手には家紋みたいな

ものが描かれているような感じだった。
優子はそのナイフを見て言う。

「あなた、まさかそのナイフであれを何とかしようと思っているの？そんなものであれを何とか出来るわけが」
「出来るんだよ。俺はこのナイフだけであれを何とか方向をずらすことぐらいができる」

そう言って隼人はナイフを構える。

「方向をずらすって一体どうやって」
「このようにするのさっ！！」

隼人は戦闘機を真っ二つにするかのような軌道で唯ナイフを縦に振るのだった。

そう。ナイフを振っただけなのだ。隼人はそれだけしかしてない。しかし、優子が見た次の光景は想像を絶するものだった。

「う、うそでしょ…… ナイフを振っただけなのに戦闘機が真っ二つに割れてるの……」

ありえない光景だった。風を切ったようにナイフを切りかざし、たったそれだけで戦闘機を真っ二つに割れてしまったのだ。

戦闘機はプロペラの回転によって、軌道が左右にずれ、戦艦の数メートル付近の海に落下するのだった。その後、水飛沫が隼人と優子に雨のように降りかかった。

それを見た隼人は、一度ホツとしながら優子の方に振り向く。

「俺の能力は空間切断と言う。俺が刃物や先端が尖った物で振るとそこから二百メートルの先までの物なんでも真っ二つに切れる能力

だ

「……なるほど。だから、戦闘機が真つ二つに切れたのね」

優子は隼人の能力に納得したて立ち上がった。けど、一つだけ腑に落ちない事があった。

「けど、どうして私を助けたの？ 昨日まで私とあなたは無関係の人間だったはずよ。私を助ける理由なんてないのにどうして」

優子はそれだけが腑に落ちないでいた。偶然隼人が優子を見つけ、殺されそうになるところを助けたのか。

しかし、隼人からの返答は少し予想外な言葉が返ってくる。

「助けるのに理由なんかあるのか？ まあ、しいて言うなら俺は雨宮だけは特に失いたくなかった」

「……どうして？」

聞き返してきた優子の言葉に、隼人は微笑みながら答える。

「優子にはもつと教えて欲しいことがあるし、それにこっちの人で初めての友達だからさ」

「……そう。とりあえず、ありがとうね、隼人」

優子は友達という言葉が嬉しかったのか、笑いながら返してくるのだった。

優子には友達と言える人間は今まで一人しか居なかった。しかも、その友達が出来たのは最近で、高校生になって、デイメスティアに来る前までは虐められていたのだ。

もちろん、デイメスティアに来るまでは『ユニオンアイティス』に所属するとは思ってなかったが、そのおかげで友達もつい最近出

来た。

そしてもう一人友達が出来、その事が優子にとって嬉しかったのだ。

「っ！？ 優子、よけるっ！！」

けど隼人が突然叫び声が聞こえ、優子はすぐに今の状況を思い出した。

それからすぐして二人の近くに戦闘機から放たれた銃弾が戦艦に当たる音が聞こえてきた。

優子はすぐに対応し、咄嗟に優子が巨大な氷の壁で銃弾を食い止めるのだった。

「そういえば、今はまだ戦闘中だったな」

「そうだったわね。じゃあ、最後の一機も墜落させるわよ！！」

優子がそう言うと、隼人たちは残り一機を撃墜するために動き出すのだった。

またこの時、優子の胸は何かを締め付けるような感じがしていたのだった。

「ちっ、なかなか当たってくれねえ！！」

「さすがに、向こうも先ほどの隼人の能力を警戒しているようね…

…」

隼人と優子は残り一機を撃墜するのに悪戦苦闘していた。

優子の言うとおり。残った戦闘機は隼人の能力を見て、危険と察して先ほどから左右に迂回しながら攻撃して来たのだ。

隼人の空間切断は直線に狙うので、能力を使うなら相手の動きを予想して使わないといけなかったのだ。

それは優子の能力も同様で、地上なら地面ごと凍らすとかできるのだが、空中になると直線にしか氷を放つことができないのだ。一応それ以外もあるのだが、それは仲間が自分一人のみしか使えないので論外なのである。

もちろん、隼人や優子以外にも迎え撃とうとしている仲間はいるが、それも空中戦には向いている人間ではなかった。

「このままだと長期戦になって、こちらが不利になるわね」

「ああ、その間にも人が殺されていくからな……」

現状を見る限り、今さながら不利だと察するのだった。

「考えてみたら、迎撃した二機は偶然に近かったのかもしれないわね」

「一機は見てないから分からないが、状況から察するにそうなのかもしれないな」

優子の言葉に、隼人は納得してしまった。

確かに、戦闘機二機を撃墜したのはある意味偶然に近かったのだ。隼人が切断した方の一機は戦闘機の方が回避するのが遅くて優子の能力によって凍らせられ、もう一機も同じようにある人物が能力によって偶然当たったものだったのだ。

要するに、今までそんな不利な状況の中を戦っていたのだ。

「こっちに近づいてきたわよっ!!」

そう思ってから少し経過すると、戦闘機が優子たちの方に近づいて来ていた。

今度こそ撃墜しようと、隼人はナイフを縦に振りかざすが、避けられてしまう。優子も同じように凍らせようと攻撃するが、それもさらに避けられてしまった。

「くそつ。銃弾は飛んでこなかったが、やはり飛んでいるものに攻撃するのは難しすぎる!!」

隼人はイラついていると戦闘機が旋回して、またしても隼人のところに向かってくる。

さっきからなんで自分たちの方ばかり向かってくるのか疑問に思ったが、今はそんな事を考えている場合ではなかった。

今度こそしとめようとナイフを構えるが、そこで異変に気付くのがあった。

さっきまでは攻撃してくるような感じだったが、まるで唯こちらに向かってくるだけの様な感じだった。

「っ、隼人しゃがんで!!」

突然優子が何かを思い出したのか隼人に言う。

隼人はどうしてしゃがむのか分からなかったが、優子と一緒に従ってしゃがむ。

それから少しすると、戦闘機が隼人たちに銃弾を撃たずに隼人たちのギリギリのところを通り抜けていくのだった。

通り抜けたのが分かると、すぐに立ち上がって戦闘機が飛んで行った方を向く。

「一体、何が起こったんだ？」

「まあ、見てなさい」

隼人は何が起こっているのかさっぱり分からなかったが、戦闘機を見続ける。

すると、戦闘機はそのまま直線を進み、少しずつ海に近づいていき、そして最後は海の中にそのまま沈んでいくのだった。

「優子、一体何が起こったんだ？ 突然戦闘機が勝手に自分から沈むなんて……」

「簡単に言えば、私の仲間がやったと言えば良いかな？ 全く、今更起きても遅いわよ……それが彼女なんだけどね」

「彼女？」

苦笑しながら、優子は言うのだった。

隼人は彼女が誰を指しているのか分からず、聞き返すのだった。

優子は聞き返してきた質問に、微笑みながら返すのだった。

「ええ。私の初めての友達になった彼女が、能力を使って倒したのよ」

戦闘機を全機撃墜した後、優子は後処理をするため隼人と離れ、隼人は部屋に戻されるのだった。

それから二時間くらいすると、優子が部屋のドアが開いて、優子に連れて行かれた。

呼び出された場所は戦艦にある食堂であり、隼人が入るとクラッカーを放たれるのだった。

「……あの、何で俺がこんなに祝福されているんですか？」

隼人は今のこの状況が全く理解できておらず、どうして祝福されているのかと思う。

「だって、隼人君は戦闘機が一機させたからよ。しかも、戦艦に衝突しそうだったのに隼人君が能力で切断したから戦艦は無事で済んだのかもしれないし、私なら出来なかったもの。さすがに戦闘機だとこの戦艦も無事に動けるか分からないからね。それに、私を救ってくれたし」

最後の辺りから顔を赤めながら、優子がそう言うのだった。

それから隼人をテーブルに座らせると、その右隣に優子が座るのだった。

テーブルには何かのパーティみたいないように豪華な食事が置かれていた。

「これ、食べていいの？」

「いきなり内を言っているのよ。今日はあなたのお祝いみたいなものだから別に構わないわよ」

「俺、そんなすごい事をした記憶ないのだけどな……」

確かに隼人がやった事と言えば唯手伝っただけであった。なのに、何故こんなに祝福されるのかが分からなかったのだ。

右では優子が豪華な食事から食べ物少し取っており、一口食べると、隼人の方に振り向いた。

「そういえば、隼人はデイメステアに行ったらどうするの？」

「どうするって、一体何を？」

優子の質問がなんなのかよく分からず、聞き返す。

「出発する前に言ったと思うけど、あなたには二つの選択肢があるよ。今までどおりに高校に行くのかそれとも、私みたいに高校行かないでさつきみたいいな人殺しの仕事に就くのか。まあ、大体の人は高校に行くって言うけどね」

そういえばそんな事を言っていたなと隼人は思い出した。敵襲などがあつてすっかり忘れかけていたのだが、隼人はその二つを選べるのだったのだ。

だが、隼人はそんな答えはとっくに決まっていたのだった。

「俺は、高校行かないで優子たちと一緒に『スキルレジエンディア』を倒すよ」

「あら、意外ね。普通なら高校行くなって言うのに」

正直な事を言うと、隼人は平和に高校生活をしたいという気持ちもあつた。しかし、そんな事はとっくの昔に捨てているのだ。初めて人を殺した時に。

「俺は『スキルレジエンディア』が許せない。実験の為に人間を普通に使うのが絶対に許せないんだ」

「そう、分かつたわ。でも、勉強はどうするの？ 隼人は見た感じだと私と違って頭がよさそうなのに……」

「それは自分で自分なりに勉強するよ。それに、もし高校も行つて『スキルレジエンディア』のこと頭が離れなかつたら大変な事になるしね」

「分かつたわ。隼人の意思なんだから私に止める権利も無いわね。それとこれからもよろしく」

優子は一度立ち上がった、隼人の方に右手を差し出した。

「ああ、よろしくな。」

隼人も右手を出して握手をするのだった。

その時、優子の顔はほんの少し赤くなっていたりしており、隼人もその事に気づくが、昨日せいだろうと思うのだった

第四話（後書き）

今回、修正前にはなかった部分の内容を少し付け加えて書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2613t/>

People Cosmos 非日常と抗う未来

2012年1月15日01時46分発行